

台風 23号

災害発生日 平成16年10月19日～21日

円山川
被災時 復旧後▶



円山川右岸の堤防決壊現場（豊岡市立野地先）〔写真提供／近畿地方整備局〕

インタビュー Interview

経験から学んだ、防災に必要な“3つの備え”

災害リアリズムに立ち、それを伝えていくことが水害経験者の責務

中貝 宗治氏 兵庫県豊岡市長



市街のほぼ全域が水没という未曾有の災害を経験した兵庫県豊岡市。円山川の増水が速く、避難指示発令後に数百世帯が水の中に取り残され、救助される事態となった。災害時から、災害後の復旧、今後の対策などについて、市長として取り組んだ中貝宗治氏に伺った。

災害以降、どのような防災への取り組みをしていますか。

防災には“3つの備え”が必要だと思います。第1は堤防の強化、ポンプの増強といった「物理的な備え」です。これは国や県の仕事なので、市は地域住民の要望を伝えるなどして施策を推進する必要があります。第2は「制度の備え」。これは応急措置から復旧に至るまでを総合的に支える法制度やプログラムの体系化を訴えていくことです。第3は、今度の災害で否応なしに得た備えとでもいえるもの。ゴミ処理や生活再建支援のための「具体的なノウハウ」です。災害時にゴミを分別して出していただけようになると後処理が非常に速くなります。豊岡市では分別せずに職員が分ける方法を取りましたが、負担が大きく、処理に7ヶ月もか

かってしまいました。現在、水害に遭った自治体が複数集まってノウハウ集を作成する準備をしているところです。

今後、自治体が進めるべき対策は何だとお考えですか。

行政は決して万能ではありません。今、どこまでを市が実行し、どこからを住民にお願いするか、必要な項目を洗い出しているところです。災害を経験したことでこれについては住民も理解しており、具体的な自助努力がかなり出てきています。もともとコミュニティの絆の強い地域ということもあるでしょう。ただ、高齢化は進んでいるので、万が一の時にどうするかを地域で話し合っています。また経験を伝えていく必要もあります。そこで2005年は、今回

の災害を例に豊富な図版を使った『防災教育資料』を作成し、10月に授業を行いました。06年からは、防災教育を正式にカリキュラムに入れてもらいました。

災害に備える上で大切な心がけは何でしょうか。

市では“災害リアリズム”と表現しています。災害は必ず起きるものである、しかし行政もコミュニティも住民もできることには限界があると理解し、その上で全員が力を合わせて、「では実際に起きた時にどうすればいいか」を具体的にイメージする、という姿勢です。それが大切な暮らしを守るための第一歩だと思いますし、この災害リアリズムを他へ伝えることが、水害に遭った私たちの責務だと思います。